

フロアを四つに仕切る巨大スライディングドア——ふすま 隈研吾がジャパン・ハウスに仕掛けたプロジェクトの活かし方

2017年3月にフル稼働を迎えるジャパン・ハウスは、GF階から3階まで、4フロア、延べ床面積2,500平方メートルの広さを誇ります。通りに面した入口から、中庭を抜けて屋内へ。カフェを併設したエントランスホール、150席収容の多目的スペース、日本文化に関する読み物がそろった読書スペース、庭園が広がります。

ここでは、空間を仕切る「壁」はありません。隈健吾氏による建物内部建築に取り入れられたのは、逆の発想でした。すなわち、オープンであること、そして、空間と空間の緩やかなコミュニケーション。古来、日本建築で使われてきた「ふすま」の役割を果たす巨大スライディングドアは、閉じれば空間を仕切り、開け放しておけば広大な空間を作ります。

空間が限られている日本という国では、時と場合に応じ、柔軟に空間を活用するのが、欠かせない生活の知恵。しかも、ふすまの開け具合は、その向こうに立ち入ってよいか否かを示すサインの役割も果たします。日本文化で相手への「思いやり」として尊ばれる間接的なコミュニケーションの手法です。

ふすまが完全に開かれているとき、ジャパン・ハウスのGF階は区切りのない広大な空間となり、カフェを併設するホールから一番奥の庭園まで繋がります。天井が高いため、収容力が高く、さまざまなクリエイティブなイベントに対応が可能です。

このスペースでは、文化、ファッション、食、歴史、ビジネス、デザイン、ロボット技術、科学、工学、アーバン・イノベーション、モビリティなど、日本の「革新力」に関係するおよそあらゆるテーマのイベントが計画されています。

1階には、大きなセミナーホールが用意されています。ここは、GF階部分と同じく、柔軟な使い勝手を誇る、会議、討議など、人々の集いの場です。2枚の「ふすま」を活用し、そのときどきのイベントに応じて、空間を仕切ることができます。パーティーにもなる家具を使えば、10人から100人までの参加者数に、自在に対応が可能です。

大通りの喧騒から離れた2階は、より重要性の高い、ショーや展覧会のために確保されています。芸術、物語、歴史展示のための場です。また、レセプションや食に関するイベント時に用いるキッチンも併設予定です。

このほか、3階部分はサンパウロの日本政府関連団体が入居の予定です。

広報

Mayumi Orimoto | +55 11 3285-3734 | 97274-3161 | mayumi.orimoto@jhsp.com.br